



日本SPF豚協会だより

Report of JAPAN SPF Swine Association 2013.4 第51号



提◆言

思い入れ…SPF養豚

ノルト・シュヴァイン・プラクシス代表 岩瀬 俊雄
元・ホクレン生産振興部技監

いま一つ元気がない、最近の「SPF」

最近、SPF養豚の魅力は薄らいできているのではないのでしょうか？そんな風に思えてなりません。では、なぜでしょうか？

筆者には、SPF豚協会の仕事振りは、手順に沿った認定審査ばかりが目につきます。農場成績集計も、どうも突っ込んだ分析ができていないと映ります。これらの結果故か、どうやら会員農場と協会との間に距離感が生じて来たように感じます。

SPF農場認定の可否を審査するだけが、認定委員会の仕事ではありません。会員の、SPFに関わる悩みや課題をしっかりと受け止め、より具体的、より実践的な対応が求められるところです。つまり、会員農場にとって、もっと身近な存在であって欲しいものです。

認定農場にとっての「SPF」の価値

SPF養豚では、SPF養豚本来が有している特性とSPF認定という形式の二面があり、ともすれば後者の方が重きをなす傾向が否めません。

当然のことながら、認定は結果（帰結）です。一年間、SPF清浄性を維持し、その恩恵を存分に享受して来た“証し”ということです。決して、「未来」の保証ではありません。

SPF豚農場認定

農場は、単に、認定されればよい、との安易な気持ちに流されないことが肝要です。

一方、認定委員会にしても、権威と厳正中立の維持は重要ですが、それにも増して、会員農場に対する技術的提言の発信が必要であると思われます。

SPF豚農場の抱く不安

どのSPF農場といえども、疾病侵入の危機を有し

ます。これは、認定停止や取り消しが、自らの農場でも起こり得ることを意味します。当然、農場は少なからぬ不安を抱くことになります。

これら農場の不安を払拭するために、清浄性喪失時（疾病侵入時）の初動対応、清浄性の回復、回復後の生産水準の底上げなど実現可能な方策を示し、これら農場の不安を緩和し再起を後押しすることは、決して軽くない協会の役割の一つであるといえます。

銘柄化とSPFとの関係

SPFの優位性を明らかにし、販売面での差別化を目指すことはよしとしますが、決して容易なことではありません。その上、差別化（銘柄化）は実現よりも維持（継続）が難しいものです。ことSPF豚肉の差別化に関していえば、SPFでなくなると同時に看板を下ろさなくてはなりません。

しかも、SPF水準の安定性（SPF認定の持続性）は、未来永劫に担保されるものではありません。常に防疫努力が求められる続け、疾病侵入の不安に苛まれます。これがSPFの看板維持のための認定狙いに走るようなことがあれば、それこそSPF界全体が信頼を失ってしまいます。

生産ピラミッドの存在

SPF生産技術・衛生技術の経験やノウハウの多くを有するのが、協会を構成する生産ピラミッドです。すなわち、全国的な取り組みや、地域特性に応じた展開については、生産ピラミッドに負うところが大きいのです。協会としてはこれらをもっと活かし、ピラミッドもSPFの機動的頭脳集団の役割を大いに発揮すべきでしょう。

筆者自身、常に、自らを磨き続ける「SPFのヒト」でありたいと思っています。

SPF種豚と認定農場の分布

(2013年3月末現在)

表1. 認定農場の分布

飼養母豚数	北海道	東北	関東	北信越	東海近畿	中四国	九州	合計	母豚総頭数
99以下	2	0	5	0	1	3	0	11	714
100~299	6	6	29	5	1	1	7	55	10,283
300~599	5	5	7	3	1	8	8	37	14,954
600~999	2	12	4	2	0	2	7	29	23,645
1,000以上	0	11	3	0	0	1	9	24	31,275
計	15	34	48	10	3	15	31	156	80,871
育成・肥育専門農場	1	4	10	5	0	1	12	33	
合計	16	38	58	15	3	16	43	189	
母豚総頭数	4,929	26,875	15,618	3,654	168	6,629	22,998	80,871	

表2. 認定農場数および飼養母豚数の推移

地域	2008年度		2009年度		2010年度		2011年度		2012年度	
	農場数	飼養母豚数	農場数	飼養母豚数	農場数	飼養母豚数	農場数	飼養母豚数	農場数	飼養母豚数
北海道	15	4,962	15	4,714	15	4,722	15	4,406	15	4,929
東北	35	26,285	35	26,459	34	26,076	34	26,310	34	26,875
関東	50	13,567	51	14,020	49	14,260	47	14,885	48	15,618
北信越	11	3,812	10	3,682	10	3,687	10	3,693	10	3,654
東海近畿	3	218	3	215	3	793	3	758	3	168
中四国	18	7,118	16	6,635	16	6,620	15	6,687	15	6,629
九州	28	19,182	30	22,403	30	21,337	30	22,322	31	22,998
育成・肥育専門農場	24		27		33		33		33	
全国	184	75,144	187	78,128	190	77,495	187	79,061	189	80,871

やむを得ない事情により認定を休止している農場については、戸数は集計に含め頭数は含めない。認定農場数は189（GGP・GP農場20、子豚育成・肉豚肥育専門農場含む）とほぼ横ばいながら、飼養母豚数は1,800頭以上増え、8万頭の大台となった。飼養頭数増加の要因としては、新規および認定復活農場の加入とともに複数の中規模農場が増頭傾向にあることによる。農場形態の大きな変化はみられない。全国の飼養母豚数90万頭（畜産統計、平成24年2月現在）に占める認定農場SPF豚の割合は8.9%と、前年度より0.1ポイント上昇した。

CM認定農場の生産成績

(2012年度)

表1 一貫生産農場

	件数 114	母豚数 平均	生産指数	農場回転率		農場飼料要求率		出荷頭数/母豚		A薬品費/肉豚	
				実績	指数	実績	指数	実績	指数	実績	指数
基準値			100.00	1.70	15.00	3.19	25.00	21.35	40.00	286	20.00
A	29	543	122.28	1.88	16.62	3.08	25.87	23.13	43.34	51	36.49
B	29	352	112.58	1.79	15.81	3.23	24.71	21.69	40.63	123	31.41
C	28	436	104.65	1.68	14.86	3.31	24.03	20.48	38.37	180	27.39
D	28	514	94.82	1.66	14.62	3.34	23.85	20.57	38.53	317	17.81
最高成績		158	134.09	2.29	20.19	2.71	28.73	27.52	51.56	1	39.96
最低成績		703	80.12	1.26	11.13	3.78	20.41	15.22	28.51	437	9.44
平均値		461	108.73	1.76	15.49	3.24	24.63	21.48	40.25	166	28.38

表2 繁殖専門農場Ⅱ（分娩・離乳後、子豚を育成し出荷している農場）

	件数 10	母豚数 平均	生産指数	分娩回数／年		離乳頭数／母豚		出荷子豚数／母豚		A薬品費／子豚	
				実績	指数	実績	指数	実績	指数	実績	指数
基準値			100.00	2.30	20.00	22.53	20.00	21.43	40.00	160	20.00
A	3	1,217	122.21	2.49	21.60	24.78	22.00	24.23	45.22	53	33.39
B	3	1,047	106.90	2.26	19.65	21.86	19.41	19.08	35.61	62	32.23
C	2	1,138	102.07	2.31	20.09	22.62	20.08	21.41	39.96	144	21.95
D	2	1,054	95.02	2.31	20.05	21.71	19.27	21.18	39.54	190	16.17
最高成績		1,156	128.59	2.55	22.15	26.43	23.46	26.04	48.60	8	39.00
最低成績		913	93.02	2.18	18.95	20.38	18.09	19.01	35.48	238	10.19
平均値		1,117	108.15	2.35	20.40	22.86	20.29	21.51	40.15	101	27.31

表3 繁殖専門農場Ⅰ（分娩・離乳後、直ちに出荷している農場）

	件数 5	母豚数 平均	生産指数	分娩回数／年		離乳頭数／母豚		出荷子豚数／母豚		A薬品費／子豚	
				実績	指数	実績	指数	実績	指数	実績	指数
基準値			100.00	2.30	20.00	22.53	20.00	22.53	40.00	90	20.00
平均値		870	121.73	2.53	21.96	26.68	23.69	36.68	47.38	51	28.70

表4 子豚育成農場（繁殖農場Ⅰから離乳子豚を導入し、肥育用素豚として出荷している農場）

	件数 3	出荷頭数 平均	生産指数	1日平均増体重(g)		出荷率		A薬品費／子豚	
				実績	指数	実績	指数	実績	指数
基準値			100.00	445.00	40.00	95.00	40.00	70	20.00
平均値		50,989	143.00	539.80	48.52	99.27	68.32	45	26.16

表5 肥育専門農場Ⅱ（繁殖農場Ⅱまたは子豚育成農場から豚を導入し、肥育している農場）

	件数 17	出荷頭数 平均	生産指数	農場飼料要求率		出荷率		A薬品費／子豚	
				実績	指数	実績	指数	実績	指数
基準値			100.00	3.30	55.00	97.50	25.00	126	20.00
A	5	4,566	128.06	3.30	55.03	99.27	42.70	61	30.33
B	4	14,964	110.97	3.43	52.88	98.66	36.58	117	21.51
C	4	16,522	101.70	3.50	51.63	98.72	37.18	171	12.90
D	4	10,133	89.93	3.18	57.00	96.91	19.12	165	13.90
最高成績		11,933	139.62	2.63	66.17	99.77	47.70	4	39.29
最低成績		6,593	84.84	3.75	47.57	95.23	2.30	210	6.66
平均値		11,136	108.87	3.35	54.19	98.44	34.41	124	20.26

表6 肥育専門農場Ⅰ（繁殖農場Ⅰから子豚を導入し、肥育している農場）

	件数 1	出荷頭数 平均	生産指数	農場飼料要求率		出荷率		A薬品費／子豚	
				実績	指数	実績	指数	実績	指数
基準値			100.00	3.25	55.00	95.00	25.00	223	20.00
平均値		11,855	118.25	2.89	61.14	93.57	17.85	7	39.26

表7 肉豚または子豚1頭当たりA薬品費使用

一貫生産農場

薬品費／肉豚	農場数	平均金額
100円未満	41	41
100円～199円	30	137
200円～299円	22	250
300円～399円	17	351
400円～450円	4	423
農場数	114	166
最高		1
最低		437
上位25%の平均	29	41

繁殖専門農場Ⅱ

薬品費／子豚	農場数	平均金額
100円未満	6	47
100円～199円	2	139
200円～280円	2	226
農場数	10	101
最高		8
最低		238
上位25%の平均	3	53

肥育専門農場Ⅱ

薬品費／肉豚	農場数	平均金額
100円未満	4	12
100円～199円	11	150
200円～215円	2	210
農場数	17	124
最高		4
最低		210
上位25%の平均	5	61

ローソニア感染症② (増殖性腸症)

東京農業大学教授 山本 孝史

対策

Lawsonia intracellularis (*Li*) は試験管内では多くの薬剤に感受性を示しますが、治療に用いられるのは、リンコマイシン、タイロシン、クロールテトラサイクリン、オキシテトラサイクリン、チアムリンなどです。ペニシリンやアミノ配糖体系薬剤（カナマイシン、ゲンタマイシン、アプラマイシン等）は無効です。また銅や亜鉛等も有効性は認められていません。

ワクチンの効果については大規模な試験成績が報告されています。Almond & Bilkei (2006)は、ワクチン接種群と非接種群各約4,000頭について、淘汰・死亡率とDGを比較しました。PPEを原因とする淘汰・死亡率は、ワクチン接種群が0.2%であったのに対して非接種群では14.9%、PPE以外の原因による淘汰・死亡率は、前者が1.4%であったのに対して後者が2.6%といずれも低率でした。またDGは、ワクチン接種群が780±45gであったのに対して非接種群では660±71gと有意差が認められ、PPEワクチン接種はPPEのみならずそれ以外の原因による経済的損失にも抵抗性をもたらすのではないかと考察しています。

また、Bak & Rathkjen (2009)は、1バッチ1,000頭規模のSPF養豚場においてワクチン接種群8バッチ7,900頭、非接種群8バッチ7,756頭について各種パラメータを比較しました。PPEの治療に抗菌剤（オキシテトラサイクリン：OTC）を投与したのは前者が1バッチ520頭（OTC 8.3 kg使用）後者が3バッチ2,845頭（OTC 38.9 kg使用）であり、OTCの使用量は約80%削減されました。またと畜場でデータが得られた3,471頭について生産成績を比較したところ、DGが46 g/日、離乳から出荷までの日数が8日、と体重量で1.25 kg、それぞれワクチン接種群が良好な成績でした。さらに、離乳後下痢の治療に投薬した頭数もワクチン接種群が

有意に少なかったとし、ワクチン接種により腸内細菌叢が安定するのではないかと推察しています。これらの試験で使用されたワクチンは2010年にわが国でも承認されました。本ワクチンは生ワクチンですので、ワクチン投与前後各3日間は、ワクチン株の増殖に影響を及ぼすおそれのある抗菌剤の投与を控えなければなりませんし、飲水投与ではワクチンを添加する水に塩素が含まれないよう配慮します。また本ワクチンは経口投与しますので糞便に排泄される恐れがあります。同居感染試験では感染しないとされていますが、SPF豚群ではワクチン投与豚と非投与豚の同居は避けた方が無難です。

本病のリスク要因については、報告によりまちまちですがオールイン・オールアウトにより大幅にリスクが低下することは共通しています。*Li*は細胞内でしか増殖できませんが、5～15℃で2週間保存された糞便を豚に投与すると感染が成立したという報告がありますので、オールアウト後の洗浄・消毒を徹底し、空舎期間を十分にとるようにします。本菌の消毒には、第4級アンモニウム塩（逆性石鹼）系の消毒剤が最も良く、次いでポピドンヨードです。次亜塩素酸ナトリウム、フェノール、クレゾール、ホルマリンなどは無効です。

*Li*は、大腸菌やサルモネラより熱には弱く45℃程度で失活しますので、豚舎の床面の消毒にはスチームクリーナーの併用が推奨されます。

[参考文献]

- 1) Almond, P. K. and Bilkei, G. (2006). Effect of oral vaccination against *Lawsonia intracellularis* on growing-finishing pig's performance in pig production unit with endemic PPE. Dtsch Tierärztl. Wochenschr. 113 (6), 232-235.
- 2) Bak, H. and Rathkjen, P. H. (2009). Reduced use of antimicrobials after vaccination of pigs against porcine proliferative enteropathy in a Danish SPF herd. Acta Vet. Scand., 51 (1), 1-4.

豚舎周辺に生息するハエ類Ⅱ

イカリ消毒株式会社 技術研究所 木村 悟朗

これから数回にわたり、IPMに基づく各防除についてまとめます。物理的防除とは、主にトラップ（捕獲機）を含む機器類を用いた方法です。IPMではモニタリングと防除後の効果判定が重要な要素となっており、トラップはそれらにも利用されています。一方、トラップによる捕獲のみではハエ類の個体数を制御できない可能性が高いため、防除はさまざまな方法の組み合わせが重要です。

ライトトラップ

ハエ類が光に誘引されることを利用したトラップです。光源にはブラックライトがよく利用されています。ライトトラップは吸引式、粘着式、誘殺式などがあります。粘着部に限りがあるため、粘着式は大量捕殺には向きません。ハエ類が大量に発生している場合は、吸引式も捕獲数の増加にともなって吸引力＝捕獲効率も低下します。しかし、これらのトラップはモニタリングや効果判定に有効です。特に、吸引式で捕獲された個体は細部まで観察することができるので、種の同定にも用いることができます。一方、誘殺式は捕虫力が低下しにくいいため大量誘殺に有効ですが、死虫はトラップ周辺に散乱することがあるため、モニタリング



写真1 粘着式ライトトラップ（オプトクリンVI・Fly, イカリ消毒株式会社）
送風ファンが筐体に付設され誘引剤を併用できる

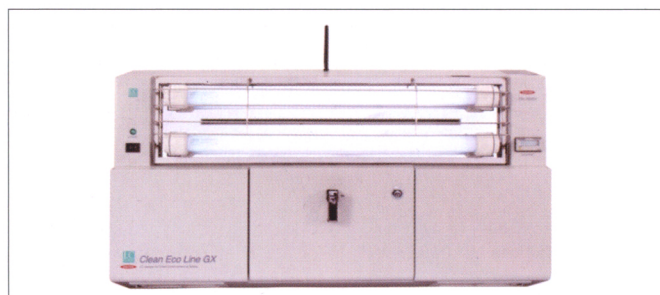


写真2 吸引式ライトトラップ（クリンエコラインGX, イカリ消毒株式会社）

や効果判定には使用しにくい側面もあります。弊社製では、モニタリング用として粘着式（写真1）、粘着式よりも多数の個体を捕獲することが期待できる吸引式（写真2）などがあります。さらに、これらのトラップの捕獲効率を高めるために、食品原料由来のハエ誘引剤（ネイテクノ・ルーア-BSパック, イカリ消毒株式会社）を併用することもあります。

ハエ取りリボン

ハエ取りリボンは長さ5cm、直径2cm程度の円筒形容器に約70cmの粘着紙（リボン）が取められています。ハエ取りリボンは、昭和30年代まで日本中の一般家庭で使用されていましたが、ハエの減少とともに見る機会は減少しています。これを屋内外につるしておく、特にイエバエは頻繁係留正からよく捕獲されます。リボンは軽量で設置できる場所も広範囲なので、ハエ類のモニタリングや効果判定に利用されています。弊社の粘着式ライトトラップに用いる捕虫紙は、ハエ取りリボンとしても利用することができます。

ハエ取りシート

粘着性物質が塗布された大型シートで、屋内外で使用できます。ハエ取りリボンはイエバエとヒメイエバエの双方が捕獲できますが、床面に置かれることの多いハエ取りシートは主にイエバエが付着します。粘着面にはハエが誘引されやすいようにハエの絵が印刷されたものもあります。近年、米国フロリダ大学の研究チームは、イエバエがハエ取りに多用される黄色よりも濃青色の縞模様を好むことを報告しています。

<参考文献>

芝崎 勲 (1999) ネズミ・害虫の衛生管理. 704pp. フジ・テクノシステム, 東京.

Well, R. H. (2013) Color is key in controlling flies, UF researchers find.

<http://news.ifas.ufl.edu/2012/02/color-is-key-in-controlling-flies-uf-researchers-find/> (accessed 22 February 2013)

紹介●SPFのお店⑰

八幡平ポークの直売店

青森県八戸市田向毘沙門19 TEL.0178-32-0871 FAX.0178-32-0872
http://www.h-pork.com/

久々にSPFポーク販売店のご紹介です。今回は岩手県の認定農場(農)八幡平ファームと、昨年12月に認定取得したばかりの(農)八幡平洋野牧場生産の豚肉を直売する青森県八戸市の「八幡平ポークの直売店」。岩手県の農場のお店がなぜ八戸市に?実は八戸市は農場のある洋野町から車で30分、農場の飼料供給基地である飼料工場の所在地でもあります。お世話になっている八戸市の人にSPF豚農場の取り組み、SPFポークのおいしさを知ってもらいたいとの思いで2011年11月に開店しました。「魚介類豊富な八戸で豚肉を食べてもらえるか心配だったんですが、予想以上の売り上げで驚いています」と話すのは農場の母体である秋田県の(農)八幡平養豚組合販売部の阿部正樹部長。岩手の2農場産の豚肉は「八幡平ポークあい」のブランドで販売しています。「あい」は岩手のI(あい)、愛のあい、そしてゴルフ好きの組合長がファンである東北高校出身の宮里藍選手の「あい」からとったとか。売り上げも順調に伸びているそうです。

お店の強みはやはり生産現場との直結。農場での会議の際に試食を行ない、生産部門と販売部門が一体となって常に肉質、味をチェックします。

販売方法にもこだわりが。カットを工夫し味付けたもも肉ステーキは、ほどよい脂でまるでロー



阿部部長(右から3人目)とスタッフの皆さん(上)

店舗の入口では特注の豚の石像がお出迎え

スのよう。

また、家族構成や用途などを考慮しどの部位も同じ値段にした「ワンコインパック(500円)」も用意。「部位のばらつきがなくなりました」と阿部部長。モツなどの内臓類もブランド販売、できたてそうざいも大好評で、雪の舞う平日午後という取材時でも途切れるなく来客が。直売の強みを活かし、しっかり地元根付いているようでした。

●協会からのお知らせ●



●地域研修会を熊本で開催

去る2月21日(木)、熊本市水前寺共済会館において、九州地区の地域研修会を開催、CM農場の生産成績の分析や特長ある農場の事例発表、意見交換などが行な

われました。該当地区の認定農場はじめ48人の方にご参加いただき、会議終了後の懇親会とともに、貴重なご意見をいただく場となりました。ご参加いただいた皆さま、ありがとうございました。

●理事会を開催

平成24年度の理事会を3月29日(金)、協会事務所に開催し、6月の総会に諮る議事等について協議いたしました。

●代議員会を6月に開催

今年度の代議員会(社員総会)は6月12日(水)開催の予定です。代議員の皆さまには後日ご案内をお送りいたします。次号に詳細を掲載いたします。

SPF豚と春野菜の雪あんかけ

●レシピ提供・ひこま豚とまごころ料理 澤店主 西川 一暢（北海道札幌市）

例年になく厳しい寒さの冬でしたが、桜のたよりは観測史上最速で届いたところも多いようです。今回のレシピは卵白を雪に見立てた、上品で春らしい逸品をご紹介します。

●材料●（2人前）

SPF豚肩ロース 4枚
菜の花 4本
たけのこ（あく抜きしたもの） 小さめ半分
わかめ（ゆでたもの） 少々
サラダ油 少々
ガーリックパウダー 少々
塩・こしょう 少々
片栗粉 適宜
〈あん〉
かつお出し汁 360cc
薄口しょうゆ 大さじ2と2分の1
みりん 大さじ1
ごま油 少々
卵白 1個分
水溶き片栗粉 少々



●つくり方●

- ① 菜の花とたけのこは下茹でしておきます。肉を2枚少し重ねて広げ、菜の花の花の方を端から少し出してたけのこと一緒に巻きます。塩・こしょう・ガーリックパウダーで下味を付けて片栗粉をまぶします。
- ② フライパンを熱し、サラダ油を入れ、①を巻き口を下にして焼いていきます。
- ③ あんをつくります。鍋に出し汁としょうゆ、みりんを入れ煮立てます。沸いたところに卵白を回し入れ、水溶き片栗粉でとろみをつけます。ごま油を入れて香りをつけます。
- ④ ②を食べやすい大きさに切って切り口を上にして盛り付け、わかめを添えて③をかけたらできあがりです。



【西澤シェフからのアドバイス】

雪が解けて、土の中から芽が出てくるイメージで仕上げてみました。

あんのとろみをつけるときは、一度火を止めて片栗粉を入れてから再び加熱すると、だまになりにくくなります。

●認定情報●

●平成25年度認定農場

[3月認定] (有効期間:平成25年3月7日から26年3月31日まで)

北海道・全農飼料畜産中央研究所上土幌種豚育種研究室、秋田県・(有)十和田湖高原ファーム、全農畜産サービス(株)由利本荘SPF豚センター、(株)シムコ大館GGPセンター、宮城県・サンエス丸森農場、茨城県・(有)中村畜産、全農飼料畜産中央研究所、千葉県・飯田武雄養豚場、石毛章俊養豚場、鈴木治彦養豚、飯田養豚、(株)シムコ館山事業所、(有)ピギー・ジョイ第2農場繁殖農場、同肥育農場、(有)伊藤養豚飯岡農場、(有)楠木ピッグファーム、平野英夫SPF豚農場、長野県・(農)エ

スピーエフこがねや第二農場、JA全農長野SPF繁殖センター、JA大北白馬アルプス農場、富山県・(株)シムコ八尾GGPセンター、島根県・奥出雲ファーム(有)、愛媛県・JAえひめアイツパクス(株)天貢ファーム、熊本県・全農畜産サービス(株)西日本原種豚場、新古閑養豚(農)、(有)七城SPFファーム、(有)やまとんファーム、(有)ピッグファーム陳、宮崎県・(有)守山畜産、鹿児島県・鹿児島いずみ畜産(株)出水農場、鹿児島いずみ畜産(株)阿久根農場 (以上31農場)

※次回認定委員会は平成25年6月6日の予定



(有)浅野農場

浅野 政輝さん

●北海道当別町

揺るぎない気持ちで豚一筋 楽しく無理せず自然体で

札幌市から車で約40分、通勤圏にありながら農業が盛んで自然豊かな当別町にある浅野農場。この冬は例年にない寒さと大雪に見舞われた地域が多かったようですが、もともと雪の多い場所だけに「札幌の方が大変だったんじゃない」とこともなげにおっしゃる浅野政輝さん(39歳)。母豚160頭規模の若き経営者です。

養豚を始めたのはご両親。もともと札幌市郊外で豚を飼っていましたが、縁あって当別町で母豚50頭の一貫経営をスタートさせました。

政輝さんが生まれたのはその翌年。小さい頃から動物が大好きなお子さんだったとか。「動物を見たくてわざわざ遠回りをせがむ子でしたよ」とお母さん。もちろん豚も大好きで、2人の兄と妹の4人兄妹の中で一番の働き手だったそうです。「最初は豚舎の2階が自宅で、豚がいるのが当たり前。手伝いというより遊び感覚でした」。本当は獣医になって動物園で働きたかったという政輝さん。残念ながらその夢は果たせませんでした。生き物に携わる仕事をしたいという気持ちに揺るぎはなく、畜産系の大学を卒業後、すぐに農場へ。

SPF養豚に変換したのは平成11年。前年に豚舎の一部が雪害で倒壊、疾病にも悩まされていたことから、建て替えを機に決意。資金繰りも考えて逐次変換しようか迷いましたが、それではうまくいかないからと、思い切ってオールアウトしーからスタートしました。



浅野政輝さんと奥さんの由香さん

直売店も経営し、ネット販売も手がけるなど販売にも力を入れる一方、イベント参加など地域の若手のリーダーとして飼育管理以外の業務も多い政輝さんですが、「病気は入れなければ、かかりようがない。と場には年に1度位しか行かない。一日に何度もシャワーを浴びて出たり入ったりだけど、当たり前のことだから苦にならない」とさすがの防疫意識です。また、昨年度の北海道枝肉共励会では最優秀賞を受賞、「出荷豚を見極める目は鈍っていませんでした」とにっこり。

高校の同級生である奥さんの由香さんも結婚を機に農場へ。ご実家はラーメン屋さんで豚とは無縁でしたが「それが結婚の条件だったからね」という政輝さんに「他の農場を知らないし、そういうものだと思ってましたから抵抗はありませんでしたよ」と由香さん。

趣味は、コースが近所に点在する地の利を活かした仲間とのゴルフ。「午前中農場で作業してから行くことも多いです」と、やはり仕事人間です。

3人のお子さんのうち息子さん2人は豚に興味があるとか。先の話とはいえ後継者問題とも無縁のようです。「豚に追われず、楽しく無理せずやっていたらいいですね」と自然体な姿が印象的でした(編集部)。

編集後記 農水省の「農業技術の基本方針(25年改定)」が2月に公表されました。養豚では経営体質の強化を推進するとあります。その中で、「SPF豚の飼養・衛生管理方法の導入」が推奨されています。認定農場としてSPF豚認定規則を遵守し、模範的な防疫管理を継続していることに自信を持ちましょう。とはいえ提言にもあるように、疾病侵入の可能性はゼロにはなりません。感染経路の遮断が大切です。車両、と場、豚群間、人、物品等の規制に緩みはないか、自農場の防疫管理体制を今一度チェックしてみましょう。(世)



日本SPF豚協会認定農場産シール

このマークは
日本SPF豚協会の
登録商標です

日本SPF豚協会だより

第51号 2013年4月1日発行(季刊)
発行 一般社団法人 日本SPF豚協会
〒101-0032 東京都千代田区岩本町1-8-2
TEL.03-5835-5375 FAX.03-5835-5376
e-mail : j.spf.a@nifty.com
http://www.j-spf.com/
発行人 北島 克好
編集人 藤田 世秀